

## にらの株養成期間中の施肥について

### 1 試験のねらい

にらは水田転作の有利な作物として作付面積が増加している。更に予冷施設の整備により、冬、夏どりにらの周年生産体制が確立されつつある。しかし、夏にらについては冬にら収穫後の2年株を利用しているため、収量が少なく品質も悪いという問題がある。そこで冬にら収穫後の株養成期間中における施肥量が夏にらの収量に及ぼす影響を検討した。

### 2 試験方法

供試品種はグリーンベルトで昭和55年3月25日には種し、7月17日に場内黒ぼく土ほ場にうね幅40cm、株間20cmの4条に定植した。施肥量はa当たり窒素4.5、りん酸4.5、加里4.2kgを施用し冬どり栽培(4回収穫)を行った。これらの株について第1表に示した試験区を設定し、夏どりの際の施肥量とハウス保温期間の長短の影響を夏どり期間(6月収穫開始と8月開始)を変えて検討した。

ハウス保温期間は冬どり終了直後の4月1日にパイプハウスのビニルをとり露地条件とした区(無保温区)と引き続き5月15日まで肩部を換気した状態で保温した区(保温区)とした。施肥量(追肥量)は窒素2, 4, 6kg/aの3区とし、4月2日に各区2kg/aを施用し、以後4, 6kg区については15日ごとに0.5kg/aずつ追肥した。6月収穫開始区は6月2日、8月3日に地上部を刈り取り収穫を開始した。収量調査は葉幅が平均6mm未満になるまで行った。1区4m<sup>2</sup>(40株)とした。

### 3 試験結果及び考察

5月2日の草丈は保温区40cm、無保温区25cmと差があったが、6月下旬以降は両区の差は認められなかった。収穫時の茎数は表1のとおりで保温区は追肥量が増すほど茎数が多くなる傾向があった。これは5月15日までのビニル被覆により、肥料の流亡が少なかったことにもよると考えられた。

収量は6月開始区では追肥2kg区が第4回目の収穫まで6mmの葉幅を維持したのに対し、4, 6kg区は6回までこの葉幅が維持された結果、かなり多収となった。一方、8月開始区は追肥量にかかわらず4回収穫まで6mmの葉幅が維持されたにすぎなかった。しかし8月開始区においても追肥量の多いほど多収であった。葉幅は6月開始・保温区がやや大きかった。

収穫終了時の葉中硝酸態窒素濃度は図-1のとおり追肥の多い区ほど高く、施肥の影響が認められた。

以上の結果から夏にらに対する窒素追肥量は少なくとも4kg/aは必要であり、保温期間を延長して生育促進を図り、6月から10月まで収穫する場合には6kg/aを要するものと考えら

れた。

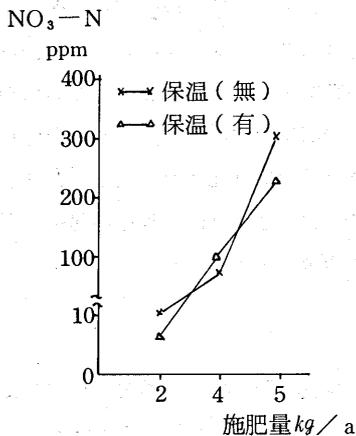
#### 4 成果の要約

冬に収穫後の施肥については4月以降夏に収穫期間を含め、窒素4 kg/a 以上を分施する必要がある、この際ハウスのビニル被覆（保温）を5月まで継続して冬刈り後の草勢を回復させ6月より6回くらい収穫を続ける場合は6 kg 程度の窒素追肥が必要と考えられた。

（担当者 野菜部 木村 栄）

表一 1 収量、葉幅及び土壌中の電気伝導度の変化

収獲開始時期	処 理	株当たり 茎数	収 量			4 回収穫 比	平均葉幅 mm	
			4 回収穫 株当たりg	総 収 量 株当たりg	a 当たり kg			
6 月	有	2	30.2	376	376	331	100	7.6
		4	36.3	426	730	642	194	7.6
		6	39.7	451	812	715	216	7.6
	無	2	33.2	319	319	281	85	6.9
		4	30.0	345	519	457	138	7.3
		6	30.6	347	546	481	145	7.3
8 月	有	2	34.9	419	419	369	112	7.3
		4	37.8	551	551	485	147	7.4
		6	38.8	641	641	564	170	7.4
	無	2	35.2	438	438	385	116	7.4
		4	36.1	517	517	455	137	7.4
		6	32.3	557	557	490	148	7.6



図一 1 施肥量と収穫終了時の葉中の硝酸態窒素